

アメリカン・ボード

アメリカン・ボードの起こり

- 1810年、ミルズ（Samuel Mills、ウィリアムズ大学生）が会衆派教会協議会に、インディアンとインド人への伝道の必要性を訴える。
- 1810年、「アメリカン・ボード」（American Board of Commissioners for Foreign Missions）の設立。
- 宣教師の派遣先
 - セイロンと国内のインディアン（1816年）、サンドイッチ島（ハワイ、1820年）、トルコ（1826年）、中国（1830年）、タイ（1831年）、シンガポール（1834年）。

日本への宣教師派遣

- 1859年、日本におけるプロテスタント伝道の開始（長崎と横浜で）
- アメリカ聖公会のリギンズとウィリアムズ、アメリカ長老教会のヘボン、そしてアメリカ・オランダ改革派のブラウン、シモンズ、フルベッキ。
- 1868年、明治維新。
- 1869年、アメリカン・ボードの進出
- 超教派的組織から会衆派主体の組織へ

日本伝道

- 1869年、グリーン夫妻の派遣。
 - 「神戸ステーション」の成立。
- 1871年、ギューリック夫妻、デイヴィス夫妻の派遣。
- 1872年、ベリー夫妻、ゴードン夫妻の派遣。
 - 「大阪ステーション」の成立。
- 1873年、女性独身宣教師タルカット、ダッドレー、グールディーの派遣。
- 1875年、神戸ホーム（今の神戸女学院）の設立。

新島とアメリカン・ボード

- 1874年、帰国。
- 1875年、大阪に赴任。ゴードン邸に滞在。
- ミッション・スクールとしての同志社
 - 新島は、ハーディーが理事長を務めるアメリカン・ボードから準宣教師に任命され、日本に派遣された。
 - ラットランドの集会（1874年）で新島が集めた5千ドルの募金もミッションの資金。

京都ステーション

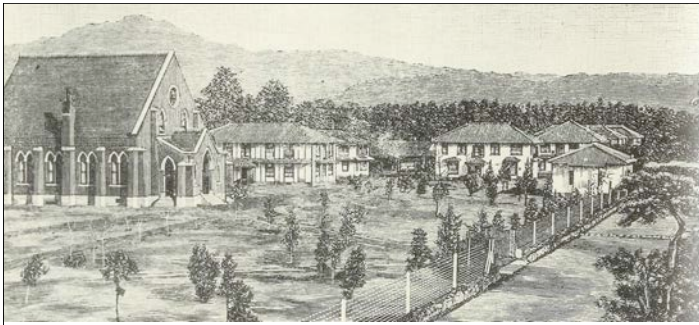
- 同志社がなければ、宣教師が京都で働くことは不可能。
- アメリカン・ボード総主事のクラーク（N. G. Clark）と新島は親密な関係にあり、クラークは日本伝道に大きな理解を示した。
- 日本は、1880年代のアメリカン・ボードの海外伝道の主要舞台となる。

伝道か教育か

- アメリカン・ボードは元来、伝道第一主義であった。
- しかし、クラークが総主事の時代に、アメリカン・ボード内部で教育重視路線が定着する。
- 同志社はボストンから多額の援助資金を受け取る。
- 新島は、宗教者以外にも政治家、官吏、医者、教員、実業家などキリスト教的な精神を抱いて自己犠牲的に働く人材を日本社会に送りこみたいと願って、大学設立を目指した。

アメリカン・ボードの貢献

- 5つの重要文化財は、すべてアメリカン・ボード関係の寄付が建築資金になっている。
- 「クラーク記念館」（旧神学館。クラークB.W.Clarkはアメリカン・ボード総主事のクラークN.G.Clarkや、札幌農学校のクラークW.S.Clarkとは別人）、「彰栄館」、「同志社チャペル」、「ハリス理化学館」、「有終館」。
- 1961年、「米国合同教会世界宣教委員会」（United Church Board for World Ministries, UWC）へと発展的解消。



同志社礼拝堂が竣工した（1885年6月）頃のキャンパス



四人の宣教師たち

- デイヴィス：「影の校長」の役割を果たす。
- デイヴィス記念講堂。「わが人生がわが遺言」（My life is my message.）
- ラーネット：デイヴィスが「情の人」なら、ラーネットは「知の人」
- ラーネット図書館。「生きるために学べ、学ぶために生きよ」（Learn to live, live to learn.）
- 1885年、山本覚馬に洗礼を授ける。
- グリーン：彰栄館、チャペル、有終館を設計・施工した。
- デントン：同志社女子部（同志社女子中・高・女子大学）の母。

新島死後の変容

- 時代風潮が国粹主義的になる。
- 新島の後を継いだ小崎弘道（第二代目社長）と横井時雄（第三代目社長）は国家主義や日本人の独立心を強調する余り、外国からの資金援助に否定的な姿勢をとる。
- 「新神学」（批判的・自由主義的神学）への傾倒が宣教師たちとの摩擦を生む。
- 1896年、同志社はアメリカン・ボードと断交し、独立する。